

「クライミング」

諫山 友美

【あらすじ】

女優・十陽子（つなしようこ）は50歳の実力派俳優。人気テレビシリーズ『母』の主演を務め、令和のお母さんと言われている。しかし、息子役の俳優との不倫スキャンダルを週刊誌にスクープされたことをきっかけに、仕事を全て失い世間からは敵認定されてしまう。良妻賢母のイメージが崩れ、夫と記者会見するも失敗、悪手続きで崖っぷちの陽子は、個人事務所のメンバーと共に、なんとかしてこのスキャンダルをなかったことにしようとする。

【人物関係表】

つなしょうこ
十陽子（50）人気女優。主人公。自分勝手にわがままだが、演技の腕は本物。

おおおかりゆうすけ
大岡竜介（53）陽子の個人事務所の社長。陽子とは長年の付き合い。仕事のできる男。

おおおかりゆうのすけ
大岡竜之介（35）陽子のドライバー。ポンコツ。社長の大岡の一人息子。

すずきひろし
鈴木博（25）陽子の事務所に所属する俳優見習い。真面目。料理が得意。

よしおかまさひろ
吉岡雅弘（30）俳優。テレビシリーズ「母」で陽子の息子役を演じている。陽子との不倫をスクープされる。

あらし
荒子みどり（28）吉岡雅弘のマネージャー。正義感が強いが、吉岡に振り回されてばかり。

滝川哲也（53）陽子の夫。舞台演出家。陽子とはほぼ別居状態だが、仲が良い。夫婦というより同志のような関係。

三澤杏（22）みさわ あん哲也の不倫相手。子供の頃は伝説の子役と言われていた。陽子とも過去舞台で共演している。

五味照子（75）ごみてる こ陽子の母親。俳優としての陽子を認めていない。女は夫を支えるものだと思っている。

1 ○スタジオ入口／エレベーターホール

大きく息を切らせ走っているマネージ

ヤーの**大岡竜介**（53）。誰かに電話

をかけているが、出ない。スタジオの

廊下には人気テレビシリーズ「母」の

ポスターが何枚も貼られている。

大岡、やっとの思いでホールに到着す

るが、エレベーターが全然来ない。

大岡に気がついた**荒子みどり**（28）

が笑顔で声をかける。

荒子「お疲れさまです！」

大岡「（顔をしかめ）連絡ありました？」

荒子「（訳がわからず）え？」

大岡、唸るようなため息をつく。エレ

ベーターは諦めて階段へ向かう。

荒子、着信に気が付く。

荒子「（出て）もしもし？」

エレベーターが到着する音。チン！

2 ○撮影スタジオ・セット

女優の十陽子^{つなしょうこ}（49）と吉岡雅弘（3

0）、がドラマの撮影をしている。

（陽子の役名は「母さん」、吉岡は「光雄」）陽子、セットの台所で鍋をかき回している。

吉岡（光雄）「母さん」

母さん、光雄を見て微笑む。

監督 「はい、一旦止めます！」

助監督が声を張り上げ、

助監督 「皆さーん、陽子さんからおにぎりの差し入れいただきましたー！」

みんな、わっと盛り上がる。「やった

ー！」「さすがお母さん！」などの声。

大岡が汗びっしょりでスタジオに到着。

陽子は大岡に気が付かない。

陽子 「よかったら召し上がってくださいーい」

陽子、スタッフに笑顔を振り撒く。

助監督 「陽子さんは今日もお弁当ですか？」

陽子 「うん。自分の手で作ったものじゃないと、落ち着かなくて」

助監督「あのお弁当、美味そうですね」

陽子「（につこり笑って）今度佐藤ちゃん
の分も作ってきてあげようか？ また体壊
したら大変なもの」

助監督「（驚いて）いや、いいです悪いです」

陽子「いいの。いいの。一人分も二人分も
変わらないんだから」

助監督「（感激）ありがとうございます！」

ようやく、陽子が大岡に気が付く。

二人で楽屋に向かって歩き出す。

陽子「（様子が変わるので）どうしたの？」

大岡「…あなた共演者と何かあるの？」

陽子「（ギクツとして）えっ？　なんで？
ないよ？　誰と？」

大岡「吉岡さん。息子役の」

陽子「ないない。（恐る恐る）何かあった？」

大岡「（無言）」

陽子「絶対ないから。安心して」

大岡「（立ち止まり）俺に嘘はつくなよ？」

陽子「マネージャーにだけは絶対嘘はつかな

い。それが私のモットーなの」

3 ○ 陽子の楽屋・中

陽子、大岡にパソコンの画面に写った
写真見せられ、言葉を失う。しばしの
絶句後、陽子は涙を浮かべて

陽子「（すがるように）…私この日凄く嫌な
ことがあつて…本当に魔が差しただけで…」

大岡「認めるんだな？」

陽子「…（頷いて）私です…やりました…」

大岡「言っておくけど俺は今、物凄く怒つて
るからな？ でもやったもんは仕方ない。

怒らないから嘘泣きはやめろ」

大岡以外では到底見抜けない、陽子の
嘘泣き。自然に泣き止む。

陽子「この写真、いつ出るの？」

大岡「明後日」

陽子「お願いなんとかして。私、これで退場
なんて耐えられない」

と、隣の吉岡の楽屋から男の悲鳴。

陽子「何！？」

大岡「（ため息）向こうも写真見てるんだろ」

楽屋の外からドライバーの大岡竜之介

（35）の音がする。

竜之介「すいません入って大丈夫ですかー？」

大岡「入れ」

竜之介、入ってくる。

竜之介「（陽子に）お疲れさまです。（大岡を見て笑う）親父どうしたの、そんな汗かいちゃって」

大岡「（竜之介に）お前今から笹塚行け」

竜之介「えっ？　なんで？」

大岡、「？」の竜之介にパソコンの画面を見せる。

竜之介「（目を押さえ）うわなんだこれ！！」

大岡「明後日記事が出るから。陽子さんの旦那に余計なこと言うなって、先に釘刺してこい」

竜之介「（指の間から恐る恐る見て）陽子さん、もしかしてこれ吉岡さんですか？」

大岡 「いいから早く。電話出ないから直接行った方がいい。厄介な事言われたら困る」

陽子 「（頷き）あいつずる賢いから。記者より先に行って！」

竜之介 「笹塚ってどうやって行くんだっけ？」

大岡 「お前ドライバーだろ？ そんなの自分で調べろ！」

ノックの音。陽子、ビクつとするが、

陽子 「（声色変えて）はい」

助監督、ドアを開け、

助監督 「十さん、そろそろお願いします」

陽子 「（笑顔で）すぐ行きまーす」

ドアが閉まった瞬間真顔になる陽子。

大岡 「俺は飯田さんと話してくるから」

竜之介 「プロデューサー？」

陽子 「吉岡くんのマネージャーと話擦り合わせてからの方がいいんじゃないの？」

大岡 「（隣の楽屋を見て）それは後でいい。こう言うのは最初に話した側が有利だから。

（陽子を見て）大丈夫か？」

陽子、青白い顔をしている。

大岡 「そんな顔するな。(陽子の目を見て)
いいか？ 前を向け。胸を張れ」

陽子 「(なんとか頷く)」

大岡と竜之介が楽屋を出ていく。

陽子、顔面蒼白。へたり込む。しかし
すぐに立ち上がる。台本を確認。

陽子、急いで楽屋を出る。

4 ○ 同・セット内

陽子、監督を捕まえ台本を見せている。

陽子 「監督、ここのセリフ、実はずっと違
和感があって…」

監督 「えっ？」

陽子 「…こんな直接的なこと言うかな。説
明しすぎな気がする」

監督 「ああー…」

陽子 「少しマイルドにするか…なくてもいい
んじゃないですか？」

陽子、にこやかに圧をかけ、そのまま

セットに向かう。

本番前。テーブルに向かい合って座る

陽子と吉岡。無言。吉岡は不機嫌な顔。

その様子を少し離れた所から顔面蒼白で見守る吉岡のマネージャーの荒子。

陽子 「（吉岡に）ちゃんと仕事して」

監督、やってきて、

監督 「十さん、ちよつと」

陽子と監督、隅の方に移動し、

監督 「さっきのセリフの件なんですけど、

確かに十さんがおっしゃるように少し直接的過ぎると思います」

陽子 「（嬉しい）…ですよね！」

監督 「（考えて）もしこれが、光雄のセリフならカットしたかもしれません。でも十さんの力があれば、このままでも十分に説得力を持って演じて頂けると思っています」

陽子 「（ガーン）えっ、ちよつと待つ…」

監督、定位置に戻りながら、

助監督 「本番！」

陽子、辺りを見回すと、大岡がプロデ
ューサーの飯田を捕まえて何か話して
いるのが見える。カメラが回る。

母さん（陽子）「お母さん本当に恥ずかしい」

光雄（吉岡）「わかってるよ…でも俺にだっ
て言い分が…」

母さん（陽子）「言い訳なんか聞きたくない。
いい？光雄がこれから全てを失ったとして
も、それは自業自得なのよ」

光雄（吉岡）「…俺、後悔してるんだ…」

母さん（陽子）「この先、誰もあなたの言葉
には耳を傾けないでしょうね。だって不倫
するような人は、人間の終わりだから…！」

監督の声「カットー！ オッケーです！」

陽子、やり切る。大岡は複雑な表情。

荒子は陽子の俳優魂に感動している。

陽子、皆の満足そうな顔を見る。そし
ていつも通り、母親らしい笑顔を顔に
貼り付けている。

○ タイトル

5 ○ 吉岡の事務所へ会議室

荒子、陽子と吉岡のスクープを報じた週刊誌を読んでいる。二人のキスしている姿や、その他下品に撮られた写真の数々。見出しには「理想のお母さんの泥沼不倫」「特大ブーメラン」「十陽子、息子にストーカー？」などの文字。荒子、部長に気がつき、立ち上がる。一緒に会議室へ向かい歩き出す。

荒子 「あの、私たち、本当に何もしないでいいんですか？」

部長 「何が？」

荒子 「記者会見とか。十さん今日やりませんかね？」

部長 「うちは必要ない。(ニヤリと笑って)

俺のストーカー案、よかっただろ？」

荒子 「あんなの全部嘘じゃないですか」

部長 「しょうがないんだよ。世間を味方に

つけるには敵が必要」

荒子 「でも…」

二人、会議室に入ると、中には吉岡が。

吉岡は座ってスマホを操作している。

吉岡 「（部長を見て笑顔で）お疲れ様です！」

荒子 「吉岡さん、これからのことなんですけど」

吉岡、荒子の顔を一切見ない。

部長 「今後の方向性としては、吉岡自身どう考えてるの？」

吉岡 「（しつかり部長の目を見て）そうですね、僕は、やっぱり芝居が好きなので、打席に立ち続けたいというか、」

荒子、吉岡の態度に傷つき、むかつく。

6 ○ 陽子の事務所（個人事務所）

陽子、謝罪会見の台本を手を持ち、窓の外を見ている。外にはたくさんの記者たちの姿が見える。ふとカレンダーを見ると、予定がびっしり書いてある

上に、バツ印が沢山並んでいる。（本来ならば雑誌の取材やバラエティ番組の出演などの予定もあった）

俳優見習いの**鈴木博（25）**が、陽子にお茶とお弁当を持ってくる。

博 「（心配そうに）陽子さん。いつものお弁当作ってきたんで、食べてください」

陽子 「いない」

陽子、出演しているCMのポスター（化粧品、車、ビール）を見て、

陽子 「本当にもう駄目なの？」

博 「CMは：厳しいかもしれませんが。でも、ドラマはまだ希望があります。今日の会見が上手くいけば…」

陽子 「朝ドラは？」

博 「きっと大丈夫ですよ。『母』だって、社長が説得してなんとか降板は免れたわけですし」

博、『母』のポスターを見て、

博 「『母』の陽子さん、本当に素晴らし

いんです。僕もいつかあんなお芝居したいです」

竜之介、入ってくる。

竜之介「陽子さん、そろそろお願いします」

陽子、博の作った唐揚げをつまみ、

陽子「（窓の外を見て）何がストーカーだよ。出鱈目ばかり書いて。吉岡なんか1回やれば気が済む程度の男なんだよ」

博「（慌てて）陽子さん、余計なことは絶対！ 言わないでください。いつも社長にも言われてますよね！？」

陽子「言うわけない。自己主張の強い中年女とか、あんたたちが一番嫌いなやつですよ。それくらいはわかってる」

陽子、目をぱちぱちしている。

博「何してるんですか？」

陽子「今日だめだな。博、目薬ちょうだい」

博「え？ あ、はい！」

博、目薬を取りに走る。

7 ○ 陽子の事務所前・外

陽子、博と竜之介に守られるように出てくる。カメラのシャッター音が響く。報道陣から矢継ぎ早に質問が飛び交う。陽子、さっきとは打って変わり憔悴し切った様子。泣き疲れたような顔。深々と記者たちに頭を下げ、心底申し訳ないという顔をし、車に乗り込む。

8 ○ 走行中の車・車内

陽子、ティッシュで目元の化粧崩れを直しながら（車に乗った瞬間から通常モード）スマホで SNS をチェックしている。（「母親の女の顔見たくない」「古い価値観の母親を嬉々としてやっていた痛かった」「良妻賢母のイメージが崩れた」など）

陽子「…なんで私だけが悪いみたいになってるの？」

博、スマホを見続ける陽子に、

博 「…人は信じたい物語を信じます」

陽子 「本当か嘘かは問題じゃないわけ？」

博 「はい」

陽子、憤慨した様子で窓の外を見ると、
自分が写った化粧品の広告看板が見える。
複雑な気持ちでそれを見る陽子。

9 ○ 会見場のホテル・一角

陽子と竜之介と博が、大岡と合流する。
会見場の楽屋に向かって歩き出す4人。

大岡は咳をしている。顔色が悪い。

大岡 「想定問答は？ 全部覚えた？」

陽子 「（得意げ）完璧。何か質問してみて」

大岡 「よし。一旦全部忘れよう」

陽子 「はあ！？」

大岡 「さつき念の為に謝罪のプロに台本見
てもらったら、ほぼ全部アウトだって言わ
れた」

陽子、信じられないという顔。

大岡 「これ」と、陽子に新しい台本を

渡す。博、大岡の顔色が悪いので

博 「社長大丈夫ですか？ 少しは寝れて
ますか？」

大岡 「寝てる暇なんかねえだろ」

博 「（心配）顔色悪いです」

陽子 「（読んで）全然違うじゃない！」

大岡 「いいか？ 前の台本に書いてあった
ことは、絶対に言うんじゃないぞ？」

陽子 「こんなのすぐに覚えられない。今日
中止にできないの？」

大岡 「俺を信じろ。陽子ならできる」

陽子 「もしダメだったら……」

大岡 「俺が助ける。そばにいるから」

博 「覚えるの手伝います。急ぎましょう」

陽子 「（決意を固め）わかった」

4人、歩き出す。しばらく歩くと、大
岡だけがついてきていない。竜之介、
不思議に思い振り返ると、大岡が胸を
押さえてうずくまっている。

竜之介 「（慌てて）親父！ 親父！！」

大岡 「（胸を押さえて痛みに呻く）」

陽子 「（気づき）ちよっ…竜さん！やだ！」

陽子と博、大岡に駆け寄る。

陽子 「（大慌てで）救急車、救急車呼んで！」

博、慌てながらも救急車を呼ぶ。

陽子 「大丈夫？！ 竜さん！」

博 「もしもし、救急車お願いします！」

陽子 「（心配しながらも）私どうしたらいいの！？ ねえ！！」

大岡 「（息も絶え絶え。会見を）やれ…やれ」

100 病院・病室

意識不明の大岡が、様々な器具に繋がれベッドに横たわっている。

少しして、竜之介と博が入ってくる。

竜之介 「心筋梗塞でした」

陽子、肩を震わせる。

竜之介 「容態は安定したみたいですけど…ま

だ油断できないって：（泣きそう）」

しくしく泣く陽子に、二人、何か慰めの言葉をかけようとする。が、

陽子 「：私はどうなるの？」

竜之介と博、「え？」という顔。

陽子 「（泣きながら）：私を助けるって言ったのに：！ どうしたらいいの：！」

竜之介と博、陽子の身勝手さに呆れる。

博 「廊下にいます：」

竜之介と博が病室を出ると、陽子の責めるように大岡を見ていたその顔が、悲しみに歪む。

1 1 〇 病院・廊下

陽子、帽子を目深に被り、竜之介と博と早足で歩いている。

陽子 「（不安げに）今どんな感じ？」

博 「（スマホを見て）お騒がせ女優が会見直前に逃亡、反省ゼロ、言いたい放題書かれています」

陽子 「（竜之介に）だから会見すればよかったのに」

竜之介 「中止を決めたのは陽子さんですよ」

陽子 「私は中止しろとは言っていない」

竜之介 「言いました」

陽子 「言っていない！！！」

パニック状態の陽子、声を荒げてしま
う。周囲の人々、驚いた様子で陽子た
ちを見る。と、大岡の私物が入ったビ
ニール袋の中のスマホ、バイブ音が鳴
り響く。袋を持っている竜之介、スマ
ホを出してディスプレイを見ると「飯
田さん」の表示。電話が切れると、す
ぐにまた電話が。スポンサーや関係者
からの着信が鳴り止まない。

竜之介 「これ：どうしましょう：」

竜之介、怖くなりスマホを陽子に押し
付ける。陽子もスマホを持ちたくない。

陽子 「：竜さんが戻ってくるまで、マネー
ジャーになって」

陽子、竜之介と博を見比べる。

二人ともとても大岡の代わりにはなり

そうにないが、

陽子 「（苦肉の）博」

陽子、博に大岡のスマホを渡す。

3人、歩きだす。博は不安げな顔。

1 2 ○ 撮影現場・バス停（ロケ地）

陽子（母さん）が、スーツケースを片

手に、バス停に立っている。少しして、

バスがやってくる。乗り込む。

監督の声「カットー！ オッケーです」

博、水を持って陽子の元へ。

博 「お疲れさまでした」

陽子、周囲を見る。スタッフはよそよ

そしく、陽子と目を合わさない。

博 「スーパー気まずいですね…」

陽子「（キッと睨み）何が？ 全然気まずく

ないけど」

博 「今日を乗り越えたら、あとはナレーシ

ヨンの収録だけになりますから」

陽子「何なの。これ以降はナレーションって。こんな屈辱的な扱い受けるなら、母さんのこといつそ殺して欲しかった」

博「何言ってるんですか。社長が、必死に上を説得したから降板を免れたんですよ」

陽子「だけど…」

博「死んだらもう戻って来られない。でも、旅に出たなら帰って来られます。社長は居場所を残しておいてくれたんです」

陽子「（納得いかないが）わかった。じゃあ、博、あれ用意して」

博「本当にやるんですか？（ビビって）この空気です」

陽子「いいから」

博、去る。

陽子はスタッフたちの中に入り、

陽子「（大声で）皆さーん、少しお時間くださいーい！ 今日なんの日かご存知ですかー！？」

周囲のスタッフたち、驚いたような困惑したような顔。時計を確認したため息をつくスタッフもいる。

陽子「（盛り上げて）今日は監督のお誕生日です！　じゃーん！」

博、バースデーケーキを持ってくる。

陽子「（大声）ハッピーバースデートゥーユー」
陽子、全力で歌うが、みんなが引いているのに気がつき博に「お前も歌え」と目配せ。博はいろんな圧に耐えきれず小声で応戦する。周囲の冷ややかな視線が痛い。

×　×　×

撮影が終わり、陽子、帰り支度をしている。流石に陽子も居た堪れない気持ちになっいて、元気がない。

陽子「そういえば吉岡はどうなるの？　死ぬ？　事故死？　病死？」

博「え？　どうもなりませんよ？」

陽子「は？」

博 「もちろん、出番は大幅にカットされる
と思いますけど：続行です」

陽子、信じられないという顔。

130 陽子の事務所

陽子と竜之介と博、作戦会議する。

陽子 「これからどうするか、しっかり考えよう」

竜之介 「親父の意識が戻ってからの方がいいんじゃないですか？」

陽子 「いつ戻るかわからないし、待ってられないでしょ」

竜之介 「でも：親父がいないと：陽子さん一人
人で決められますか？」

陽子 「バカにしないでよ。私だって意思を
持った大人なんだから。自分で決められる」

竜之介 「じゃあどうするんですか」

陽子、無言。竜之介「ほら」という顔。

陽子 「（考えて）：やっぱり会見する？」

竜之介 「今更ですか？」

博 「でも：社長は会見してこの騒動収めようとしてましたよね」

竜之介 「(考えて) 親父ならどうするか…」

陽子 「竜さんは、使えるものはなんでも使ったと思う」

3人、考える。陽子、ひらめき、

陽子 「哲也と二人で会見するのはどう？」

竜之介 「：旦那さんめっちゃ怒ってるんじゃないですか？」

陽子 「(怒ってるわけ) ないない」

博 「(気を遣う) 別居してるんだと思ってました」

陽子 「別居っていうか、向こうが仕事部屋にいる時間が長いだけ」

竜之介 「なんで旦那さんも一緒に？」

陽子 「たまに見るでしょ。夫婦会見。夫婦の中ではもう解決済みってアピールするの
が、結局一番丸く収まるんじゃない？」

竜之介 「なるほど。：やってくれますかね？」

陽子 「そこはなんとかする」

博 「（考えて）確かにそれは良い考えか
もしれません」

博、スマホを出して、

博 「ほら。（見せる）＃十陽子の夫が一番
の被害者」

3人、そのハッシュタグをじっと見る。

14 ○ 哲也のマンション（仕事場）・室内

陽子、夫の**滝川哲也（53）**の仕事場
に来ている。

哲也 「：俺、本当に傷ついたよ」

哲也、しばらくしてにつこり笑う。

陽子 「あなただって女いるでしょ」

哲也 「いない。一緒にすんな」

陽子 「知ってるんだから。若い子と浮かれ
てるの」

哲也 「え？ 嫉妬してるの？ もしかして
それである男と関係持ったとか？」

陽子 「違う違う。嫉妬じゃない。ナメた態
度取られるのが腹立つんだよ。自分が馬鹿

にされてる気がして許せないの」

哲也 「何勘違いしてるのか知らないけど、

俺本当に何もないよ」

哲也、タバコに火をつけて陽子に渡す。

陽子 「（ひとくち吸ってあまりのうまさに）
はああ」

陽子、哲也にタバコを渡す。

哲也 「一口なら吸ったうちに入らないから。
（ひと口吸って消す）だから今回のことは
許してやるよ」

陽子 「うるさい。で、会見は？　してくれ
るの？」

哲也 「（考えて）俺も陽子には協力したい
けど、うーん」

陽子 「何よ」

哲也 「（考えて）いや、俺も最近忙しいか
ら：難しいかもしれない」

陽子 「（疑わしげに）：忙しい？」

哲也 「次の公演、助成金を通らなかったか
ら大変なんだよ。資金集めにいろんなとこ

ろ回らないといけなくて：」

陽子、考えている。

陽子 「いくら必要なの？」

哲也 「いいよ。いいよ。そんな」

陽子 「いいよ。払う。だから会見して。私
このまま負けるなんて絶対嫌なの」

哲也 「：やるかあ」

15 ○ 陽子の事務所前・外

雨が降っている。

陽子の自宅前に、報道陣が集まってい
る。報道陣の前、相合傘の陽子と哲也。

陽子 「皆さん。この度は多大なるご迷惑を
おかけいたしました、誠に申し訳ございま
せんでした」

陽子と哲也、深く頭を下げる。

陽子 「雨の中すみません。みなさん、大
丈夫ですか？」

陽子、記者たちを気遣う。

哲也 「僕たちは今まで、俳優として演出家

として、夫婦としても、至らない点を支え合ってきました。今回のことは僕にとっても衝撃ではありましたが、…これは、僕たち二人が今後もより強固に支え合っていくための…（涙ぐむ）神様が与えてくださった試練だと思っています…！」

陽子、哲也の芝居がいい感じで悔しく、
陽子 「自分の軽率な行動、心から反省しております。これから…」

哲也 「（遮って）これからが陽子の俳優として、人としての見せ所になっていくと思います。皆様、ご指導のほど、よろしくお願いいたします！」

陽子 「（イラッとするが）今回のことで夫にキツくお灸を据えられました。今後は」
哲也 「（遮って）今日のように、私たちの心にも今雨が降っておりますが、いつか「雨降って地固まる」と皆様に言っていただけのよう、これからも精進してまいります。この度は大変申し訳ありませんでした」

陽子、「何こいつ？」と思いながらも

哲也と共に頭を下げる。何だか良い感

じに終わりそうな空気。だが、

記者1「十さん。今日は随分地味な格好でいらっしやいますね」

陽子「（微笑んで）はい？」

記者1「最近はお作りが痛々しかったというご意見もありますが、どうお考えですか？」

哲也「ははは。（陽子を見て挑発に乗るなと言う顔）」

陽子、何も言わずに微笑む。

記者2「十さんが吉岡さんにしつこく言い寄っていたという噂は、本当ですか？」

陽子、何も言わずに微笑む。

記者2「わざわざ息子役に手を出したというのは、やっぱり十さんご自身が、実年齢より若いという自信があたりだったんですね（笑う）」

陽子、堪えるべきだとわかっているが、
陽子「いつも綺麗でいろ、いつまでも若く

いろと私に求めてきたのは、あなたたちですよね？」

記者2 「はい？」

陽子、つい真顔になる。と、

記者2 「そんな怖い顔しないでください。いつも笑顔でこそその十さんでしょ」

陽子 「だから、私にいつも笑顔を求めてきたのはあなたたちですよ？ 言っておきますけど、こっちがその気になれば吉岡を落とすなんて赤子の手を捻るより簡単です」

哲也 「やっちゃまった」の顔。目を瞑る。

16〇 陽子の事務所

お通夜のような空気の事務所メンバー。

陽子、ソファで燃え尽きている。哲也

は陽子を抱きしめるように支えている。

哲也 「大丈夫。みんなすぐ忘れる」

陽子 「：なんで私のこと守ってくれなかったの：？」

竜之介 「いや、哲也さん結構しつかりやって

くれてましたよ」

哲也 「（竜之介に首を振り）ごめんな。俺もつとやれたよな」

博 「（怪訝な顔）」

哲也 「（竜之介と博に）お前らなんでわからないんだよ。自分がしくじったこと、陽子が一番わかってんだよ。あえての八つ当たりだろうが」

竜之介 「：わかんないですよそんなの」

哲也 「そんなんで大岡くんの代わりやれるの？ 心配だなあ」

と、事務所の電話が鳴る。竜之介出る。

竜之介 「もしもし？」

哲也、テレビをつけると、「十陽子、

逆ギレ記者会見」が流れる。

哲也 「（じっと見て）俺結構テレビ映りいいな」

博 「哲也さん：！」

哲也、テレビを消して立ち上がり、

哲也 「じゃあ俺行くよ。：舞台の見積もり

はまた改めて送るね」

哲也、出ていく。

博 「（言いづらそうに）失言もそうですけど、旦那さんに謝らせたのが悪印象だったみたいです」

陽子 「でもそれが一番丸く収まるって…」

博 「それは『不倫したのが夫側の場合』、の話だったのかもしれないですね」

陽子 「（怒って）博がやれって言ったんでしょ！ どう責任取るつもりなの！」

博 「…すいません」

電話を終えた竜之介、青い顔。

竜之介 「陽子さん、今の電話「母」のプロデューサーからで…やっぱり降板の方向でお願いしたいって…」

陽子 「どうして…」

竜之介 「スポンサーの意向と、視聴者からのクレームもかなりあったみたいで」

陽子 「そんな…だめ。これがなくなったら、一つも仕事なくなっちゃう。明日飯田さん

と話すから、もう1回連絡して」

竜之介「：わかりました」

陽子「（博に）ねえ、CMの賠償とか違約金もあるんだよね？」

博「僕も詳しいことは分かりませんが、とりあえずギャラは全額返金、撮影にかかった費用もこちらの負担になると思います。違約金に関しては社長が回復し次第ですかね：」

竜之介「あ、あと哲也さんの舞台のお金もお忘れなく」

陽子、顔面蒼白。

17〇 テレビ局・会議室

飯田に頭を下げている陽子と竜之介、

博。

陽子「誠に申し訳ございませんでした」

飯田「残念ですけど、降板はもう決定事項なので：」

陽子「（懇願）お願いします。なんとかかなり

ませんか。ナレーションだけでもやらせて下さい。お願いします！」

飯田、イライラの混じった顔。

陽子「私、この役が好きなんです。私にとっては久しぶりの主演ですし、どの俳優より巧く演じられる自信があります」

飯田「（ため息）演技力以前に、もっと自分のイメージを大事に守って欲しかったです」

陽子「イメージ……？」

飯田「それに、そんなにこの役を大事に思ってくださっているのなら、なんであんな軽率なことなされたんですか？」

陽子、何も言い返すことができない。

180 同・廊下

意気消沈して歩く陽子。竜之介と博はかける言葉もなくついていく。と、

荒子「陽子さん」

荒子が陽子に気がつき声をかける。

陽子「…ああ、荒子ちゃん」

荒子「（言葉を選び）あの…私、今回のことは…個人的にはすごく不公平だなんて思ってます…」

陽子「（無言）」

荒子「…あと記者会見で陽子さんが吉岡について言ったこと…少しスカッとしました…私いつも吉岡に舐められてるんで…」

荒子、お辞儀をして去ろうとすると、
陽子「私が吉岡にストーカーまがいのことしてるって、マスコミに流したのはお宅の事務所よね？　よくそんなこと言えるね」

荒子「（慌てて）あっ…」

陽子、怒りの表情で立ち去る。

荒子「（まずい）」

19〇 走行中の車内

重苦しい空気の車内。

陽子が窓の外を見ると、陽子の化粧品の広告看板が外されているのが見える。

竜之介 「陽子さん。元気出してください」

陽子 「（同情されていると感じ）うるさい」

博 「あの：これからみんなで社長のお見舞い行きませんか？」

竜之介 「（頷きながら）お。いいね」

陽子 「行かない」

博、陽子の悲しそうな顔を見逃さず、

博 「陽子さん：社長に会いたって、思っ
ていいんですよ。変に気持ちを押し殺す
と、あとが辛くなります」

陽子 「何わかったようなこと言って、バカ
にしてんの？ 大体竜さんが倒れたからこ
んなことになってるんでしょ？ 病院なん
か行かない」

博 「バカになんかしてないです。心配し
てるんです：」

陽子 「今後のスケジュールは？ どうなっ
てるの？」

博 「何もありません。白紙です：」

竜之介 「休んでください。しばらく大人しく

してた方がいいです」

陽子 「だめ。このままじゃ本当に終わっちゃう。負けちゃう」

竜之介 「（うんざりして）もうしようがないでしょう？　なんでいつも勝ち負けなんですか。何にそんな勝ちたいんですか」

陽子 「あんたみたいに平坦な道に立ってるやつにはわからない」

竜之介 「はい？！」

陽子 「こっちはいつも坂道にいるんだよ。勝ちたいわけじゃない、負けたら転がり落ちちゃうの！」

竜之介 「（呆れて）わけわからん」

陽子 「わかってたまるか」

竜之介 「俺らだって陽子さんのために毎日毎日頑張ってるんです。それに、親父のせいでこうなったっておっしゃいますけど、違いますよね？！　陽子さんが、不倫なんかするから！　こんなことになったんです！　全部陽子さんのせいです！」

陽子 「（怒って）降ろして！」

竜之介 「降ろしません！」

陽子 「（運転席を蹴り）降ろせ！」

2 0 〇 陽子のマンション・裏口

車が猛スピードでやってきて停車。中から陽子が降りてくる。怒りの形相でマンションの中へと入っていく。

2 1 〇 同・室内

陽子、部屋に入ってくる。一旦座るが、立ち上がって引き出しを開ける。中には陽子と大岡と出演映画の監督とで撮った写真が何枚か出てくる。

陽子、それらの写真をじっと見つめ、突然子供のようにわっと泣き出す。

2 2 〇 走行中の車内

竜之介、窓を開けて思い切り、

竜之介 「クソババア！」

博、気持ちがあるので咎めない。

竜之介「博も、ほら、言っていーいぞ」

博「僕は大丈夫です」

竜之介「勝ち負け勝ち負けなんなんだよ」

博「社長も陽子さんは勝ちにこだわりすぎるって言っていました」

竜之介「だろ？」

博「でもだからここまで来られた、とも言っていましたけど」

竜之介「（無言）」

博「僕は陽子さん尊敬してます。滅茶苦茶な人だけど、やっぱり凄い俳優ですから」

竜之介、黙って助手席の窓を開ける。

博「（しばらく考え）…クソババア！！」

竜之介「よし。明日からも頑張ろう」

23〇 陽子のマンション・室内

陽子、多少落ち着き、ワインを飲んでいる。スマホのバイブ音が響く。「母」の表示。陽子、身構えるが電話に出る。

陽子「お母さん？」

陽子の母、五味照子（75）の声。

照子（声）「やつと出た。何回電話したと思
ってるの」

陽子「ごめん。バタバタしてて。：時間でき
たから、近いうち会いに行くよ」

照子（声）「いい来なくて。恥ずかしいから」

陽子「（傷ついた顔）」

照子（声）「だから女優なんてやるなってお
母さん何百回も言ったのに。調子に乗って
るからこんな目に遭うの」

陽子「：そうだね。調子に乗ってたね。：全
部私が悪い」

照子（声）「哲也さんは今いるの？時間ある
ならちゃんとご飯作って主婦らしいことや
りなさいよ。あんなろくでなしでも旦那さ
んなんだからね？」

陽子「（うんざり）わかった。あ、ごめん。
ちよっと人来たから：」

陽子、電話を切る。ため息。

と、すぐにまたバイブ音。哲也からの
着信。

陽子「（出る）もしもし」

哲也、稽古の休憩時間に電話している。

哲也「大丈夫か？」

陽子「え？」

哲也「参ってるんじゃないかなーと思って」

陽子「…いつもタイミングいいよね」

哲也「ええ？（笑って）陽子のことは俺が一番
番わかってるからな」

陽子「…博と竜之介とは全然違う」

哲也「あんなガキに俺と大岡くんの代わりは
無理だろ」

陽子「私、もう終わりだよ。みんな離れてく。

誰も味方なんかいない」

哲也「あんまり考えすぎないで。今度飯でも
行こう。…それじゃ」

陽子、電話を切る。

マスクや帽子で顔を隠した陽子、慣れない様子で買い物している。

250 哲也の仕事場のマンション

陽子、危なっかしい手つきで、料理を作っている。うまくできずイライラする。少しして、鍵の開く音。陽子、ニンマリ笑い、玄関へと向かう。

帰宅した哲也と、隣には若い女、三澤

杏（22）の姿。

鉢合わせの3人。フリーズする。

× × ×

3人、ダイニングの椅子に座っている。

陽子 「少しでも信用した私がバカだった。

（杏に）あなた、私に勝ったと思って、優越感に浸ってたんでしょ？ 私を馬鹿にしてたんでしょ？」

杏 「大変申し訳ありません！！ あの、

私、帰ります。本当にごめんなさい」

哲也 「うん。それがいい」

杏、ずっと顔を隠すようにしている。

帰ろうとする杏。陽子、杏の顔を見て、

陽子 「（思い出し）……アニー？」

杏 「（観念して）……ごめんなさい……ハ

ニガンさん……」

哲也 「（驚いて）え！ 共演したことあつ

たんだっけ？」

陽子 「（軽蔑）あなた……！ 子役に手を出し

たわけ？」

哲也 「俺子役時代は知らないよ。もう大人。

え？ 大人だよね？」

杏 「（頷く）」

哲也 「良い芝居するんだよ」

陽子 「知ってる。この子、舞台では一時期す

っごく話題になったんだから。子役と言え

ば三澤杏だったの。ちよつとお、久しぶ

り！ 大きくなったね！」

杏 「陽子さん、お久しぶりです。……ごめん

なさい」

陽子 「（哲也に）いい加減にしてよ。杏はね、

才能があるの。これからが大事な時なの。
あなたが目先の欲望を優先させたせいで、
才能の芽を摘んだって自覚あるの？」

哲也 「（困惑）どっちに怒ってるわけ？」

陽子、どちらにも怒っている。

突然、杏が堪えきれずに嘔吐する。

杏 「ごめんなさい。ずっと、変な匂いが
してて…」

陽子、台所を見る。そして違和感と共に、杏を見つめる。

260 陽子の事務所

作戦会議をしている陽子と竜之介と博。

陽子 「哲也も不倫してるって公表したら、

世間の流れは変わると思う？」

博 「その場合って、陽子さんは哲也さんと

離婚するんですか？」

陽子 「え？…離婚は…したくないけど…」

竜之介 「陽子さんの夫婦関係って変わって
ますよね。（考えて）…なんで一緒にいる

んですか？」

チャイムが鳴る。皆、誰？という顔。

博、インターホンを確認しに行くと、

荒子が立っている姿が見える。

× × ×

菓子折りがテーブルに置いてある。

荒子 「（猛反省）先日は本当に申し訳あり

ませんでした！！ 軽率でした」

陽子 「許してあげるからさ、一つ教えて」

荒子 「：なんですか？」

陽子 「吉岡のスキヤンダル、知らない？」

荒子 「えっ：」

陽子 「（荒子の目をじつと見て）知ってる

わけないか。吉岡は荒子ちゃんのこと全然

見てなかったもんね」

荒子 「（噛み締めるように）そうなんです

：！女性スタッフに対してはほぼほぼあん

な感じで：ナメられてます」

陽子 「そんな奴と仕事して楽しい？ それ

が荒子ちゃんのやりたかったことなの？」

荒子 「え？」

陽子 「まあいいや。荒子ちゃん、ちよつと知恵貸して」

× × ×

陽子 「どう思う？」

荒子 「いいんじゃないですか？ 夫の不倫に苦しんで、吉岡と間違いを犯してしまっただけ、筋書き自体はいいと思います」

陽子、嬉しそうな顔。

荒子 「ただ、批判は全部その彼女の方に行くでしょうね」

陽子 「：哲也じゃなくて？」

荒子 「（頷く）おそらく」

陽子 「私の代わりに今度はあの子が叩かれるってこと？」

竜之介 「いいじゃないですか。旦那さん寝とった女なんだから」

陽子 「（考えて）ダメ。流石にそれはきつ
いよ。違う手考えよう」

博 「：そうですね」

陽子 「今あの子妊娠してるから、慎重に
かないと」

3人、驚く。「えっ」

荒子 「：妊娠してるんですか？」

陽子 「そう。産むにしてもシングルマザー
でやっていくって言ってるけど。（考えて）
ねえ、そうまく使えないかね？ 妊婦な
らそこまで叩かれないんじゃない？」

竜之介、博、荒子、これ以上ないほど
気まずい顔をしている。同情するよう
な、哀れむようなその顔を、陽子は不
思議そうな顔で見ている。

27〇 ホテル・ラウンジ

高級ホテルのラウンジ。杏が緊張した
面持ちで座っている。少しして、陽子
がやってきて、杏の前に座る。

陽子 「体調は大丈夫？」

杏 「：はい。今日はなんとか：」

陽子、覚悟を決めたように頭を下げる。

陽子 「哲也のこと、よろしくお願いします」

杏 「（驚いて）ちょっ、やめてください！ 私、哲也さんを陽子さんから取るつもりなんてないんです：！」

陽子 「いいの。哲也はずっと子供を望んでいたし、今は私よりあなたを愛しているの。私にはそれがわかる」

杏 「陽子さん：」

陽子 「：私もあなたと同じで、子供の頃からこの業界にいたの。今まで血の滲むような努力をして、欲しいものは大抵手に入れた。だけど私：（絞り出すように）子供だけはどんなに頑張ってもできなかった」

杏、無言。

陽子 「女として生まれたからには、子供を産んで育てないといけない、それができないれば一人前でないって言われている気がして：ずっとしんどかった」

杏、無言。

陽子 「：お母さんになってみたかった：」

杏 「私：哲也さんからは、そんなことも聞いてなくて：」

陽子 「哲也は子供が大好きだから。：私にできなかった、良い家庭を築いてください。可愛い赤ちゃんを産んでください：」

陽子、泣く。杏は何度も「ごめんなさい」と頭を下げる。

周囲の客たちはその様子を驚いて見ている。その中に、包囲網を張るように博、竜之介、荒子の姿も見える。博は動画を回している。荒子、写真を添付して週刊誌にリークのメールを打つ。

280 陽子の事務所

事務所の机に週刊誌が置かれている。そこには杏のお腹に手を当て、不細工な顔をして号泣している陽子が載っている。見出しは「十陽子、実は略奪愛されていた・哀れな不倫の真実」陽子はそれを見て、誇らしい顔。

博はパソコンを操作している。

博 「（嬉しそうに）トレンド上がってます」

陽子 「なんて書いてある？」

博 「ほとんどが同情です。（読む）これは心が折れる。このタイミングで吉岡に優しくされたら揺らぐ。妊娠できなかった妻を捨てる旦那最低」

陽子 「（満足げな顔）」

博 「でも…いいんですか？ こう言っちゃなんですけど、惨めな女のイメージ付きますよ」

陽子 「惨めな女は敵にならない」

博 「でも…知らなかったです。陽子さん、

子供…」

陽子 「（呆れて）博さ、若いのにそんな考えで大丈夫なの？」

博 「え？」

陽子 「女がみんな、心の底では子供を欲しがってるはずだっと思うの、やめた方がいいよ」

博 「（話が飲み込めない）」

陽子 「人は信じたい物語を信じるって、博が
言っただけでしょ」

博、呆氣に取られたような顔。

29 ○ 陽子の事務所（回想）

陽子、杏と話している。

杏 「陽子さんにとって一番大事なものは、
お芝居なんですよ？ 私にできることが
あるならなんでもやります」

陽子 「でも：今度は杏があることないこと
めちやくちやに言われちゃうかもしれない」

杏 「私はケジメとして芸能界を引退する
つもりです。だから、最後にどんな芝居で
もいいですから：やらせてください」

陽子、杏を見つめ、頷く。

杏 「その代わり」

陽子 「え？」

杏 「哲也さんは下さい。いいですか？」

陽子、迷うような顔。

300 走行中の車内

車に乗っている陽子、竜之介、博。

車が停車すると、荒子が乗り込む。

車、また走り出す。

博 「（不安げに）荒子さん、本当にいいんですか？」

荒子 「私、向こうは辞めるつもりですから」

竜之介 「なんでわざわざこんな崖っぷちな？」

荒子 「道は険しいですけど、みなさんとお仕事をしたいんです。それが、私の今やりたい事なんです」

竜之介 「うまくいきますかね」

博 「…これから何が起こるかなんて、誰にもわかりません」

荒子 「そうですよ」

博 「坂道を転がり落ちたら、あとは登っていくだけです」

陽子、窓の外を見ながらみんなの話を聞いている。

荒子 「さあ、営業頑張りましたよ！」

博 「：哲也さんたち大丈夫ですかね？」

陽子 「哲也は大丈夫。許される側だから」

走り続ける車。陽子はこの数日のことを思い出している。

（トウモロローのイントロが流れ出す）

× × ×

病室で、意識の戻らない大岡の手を握る陽子。病室のテレビでは、朝ドラの陽子の代役に、女優の森市子が大抜擢されたというニュースが流れている。

× × ×

放送中の『母』。陽子の姿はないが、吉岡は平然と出演し続けている。

× × ×

陽子、離婚届を書いている。哲也は杏と新しい人生を歩み出す。

× × ×

車内。今後のことを考えると、陽子をはじめ全員が暗澹たる気持ちになる。

荒子 「（陽子が心配で）：大丈夫ですか？」

陽子、色々不安だが、今は胸を張るしかない。前を向きゆっくり歌い始める。

陽子 「寂しくて憂鬱な日には、胸を張って、歌うの」

みんな、この状況で胸を張る陽子に感銘を受ける。

みんな 「おおーーーー！！！」

車内、ほんのいつとき、一つになる。

陽子 「朝がくれば、トウモロロ、涙の跡も消えてゆくわ」

みんな 「トウモロロ、トウモロロ、アイラブ
ヤー トウモロロ 明日は幸せ」

中年が歯を食いしばって歌うトウモロロ。
「（民衆の歌」のテンションです。

ラストはハモります）

みんな 「トウモロロ、トウモロロ、アイラブ
ブヤー、トウモロロ、明日は、しあーーーー
わーーーーーせーーーー」

終わり

